

第35期第7回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



令和5年3月13日（月）京都市役所本庁舎 正庁の間で、第35期京都市社会教育委員会議の7回目となる会議が開催されました。今回は、「文化庁移転を契機とする文化力の向上・発信について」というテーマで議論が行われました。会議の模様をマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち12名） ※五十音順

石川 一郎 委員、稲垣 恭子 委員、岡田 智子 委員、園部 晋吾 委員、
永田 紅 委員、西田 晋 委員、本郷 真紹 委員、柁木 良子 委員、
森 清頭 委員、森口 真希 委員、山口 修平 委員、山野真梨紗 委員

第35期第7回社会教育委員会議次第

開 会

1 議 事

「文化庁移転を契機とする文化力の向上・発信について」

説明 総合企画局文化庁移転推進室 市田香 文化庁移転推進第一課長

2 報 告

- (1) 「京（みやこ）まなびいニュースレター」について
- (2) 令和5年度指定都市社会教育委員連絡協議会（WEB開催）について
- (3) 令和5年度京都市教育委員会予算案について
- (4) 令和5年度「学校教育の重点」（京都市教育委員会）について

3 主催事業及び刊行物の案内

閉 会

■ 開会

■ 教育長挨拶

■ 新任委員 自己紹介

■ 議事 「文化庁移転を契機とする文化力の向上・発信について」

○ 事務局説明

文化庁の京都移転が令和5年3月27日と目前に迫ってきました。これまで、「文化庁移転記念」を冠した関連イベントの実施や情報発信が行われてきたところですが、京都移転を

契機に文化庁の機能強化が図られた生活文化の振興について、委員の皆様のご経験から、具体的な事例も踏まえてご意見を賜りたいと考えております。

○ 事務局説明（総合企画局文化庁移転推進室 市田課長）

本日は、文化庁移転の意義や、文化庁が今後どういった分野に力を注いでいかれるのか、また京都に期待されていることなどをお話させていただきます。

まず、文化庁の京都移転の概要です。文化庁の移転は、明治維新以来、初めての中央省庁の移転です。移転が決まったのは2016年で、その翌年には、東山区に先行組織として文化庁地域文化創生本部が移転してきました。本格移転の場所は、元京都府警察本部本館です。

次に文化庁の移転の意義についてです。中央省庁の移転は、東京一極集中是正のため、国が地方に募集をかけたものです。その中でも、日本全国の文化の力による地方創生、具体的には地域の多様な文化の掘り起こしや磨き上げによる文化芸術の振興が、特に文化庁移転の意義になっているものです。

この移転の決定に伴い、文化庁では大規模な組織改正が行われました。文化庁は、芸術文化や文化財の保護、著作権等の業務を主に所管していましたが、京都移転を見据えて文化の新たな領域、また既存の新展開等の新たな業務も所管することになりました。

具体的に機能強化を特に図られたのが、食文化をはじめとする生活文化の振興と、文化資源を活用した文化観光の分野です。この二つの分野については、先日、文化庁移転協議会が開催され、永岡文部科学大臣から、京都に食文化と文化観光の推進本部を設置し、そこから政策立案を進めるといった発言もありました。

次に、文化庁移転で京都に期待されていることと、なぜ京都が移転先に選ばれたのかについてお話しします。そのために、この京都のまちの特色について振り返りたいと思います。

まず、歴史都市でありながらも常に先の時代を見据えた新たな価値を創造するまち、と捉えております。京都の歴史は長いですが、その中でも明治維新以降の大きな出来事を紹介させていただきます。

明治維新で京都市は都市存亡の危機に陥り、深刻な人口減少で3～4年の間に34万人から23万人、約3分の1が減ったと言われております。洛中についても6割が焼け、遷都宣言もないままに、京都は都の地位を失っていきました。

その中で、「子どもさえしっかり育てば未来は明るい」として、明治2年に64の小学校を作りました。まだ廃藩置県が行われておらず、京都府や京都市、文部科学省等の組織もない中、「まず学校をつくる」ということで、自分たちでお金を出し合いました。この中で「かまど金」という言葉が残っていますが、これは子どもがいる・いないに関わらず、かまどのあるお家はお金を出す、あるいはかまどの数ごとにお金を出すというものです。そのようにして64の小学校を作って、運営されました。

また明治13年には、今の京都市立芸術大学の前身である日本初の画学校、京都府画学校ができ、29年には京都工學院高校の前身である日本初の工業学校もできました。そしてそれらを産業につなげる琵琶湖疏水や発電所を作って、市電を走らせて博覧会を開催して、今の京都があるわけです。こうした住民自らの力で、次の時代を担う人を育て、先の時代を見

据えた新たな価値をつくり出してきた。そういった積み重ねが京都のまちの特色ではないかと思います。

令和4年5月に、岸田首相が文化庁移転整備事業の視察で京都に来られ、京都の文化芸術関係者と懇談されました。そのときに、「東京から京都に文化庁が移転して、何が大きく変わるのですか」という質問を投げかけられ、岸田首相は、「京都にはその背景に生活があって、歴史の積み重ねがある。その京都の文化を背景に、文化庁が世界に発信することは、間違いなく京都の歴史の重みが発信の厚みにつながる。発信する場所が、京都であることが大きな意義につながる」と答えられました。これは先ほど紹介した京都のまちの特色、積み重ねられてきた京都の文化を高く評価されて、それを移転先の京都に期待しているということを端的に表したお言葉ではないかと思います。

文化庁が京都移転を契機に力を入れている生活文化の振興、これはそれぞれの地域に根差した生活文化を大事にするということになります。

京都の生活文化の例として、伝統芸能、伝統工芸、京料理、茶の湯、生け花、祭りなど、文化として広く知られているものがあります。これらは、多くの方々を魅了していますが、一方で担い手の減少等の課題もあります。

別の例として、地蔵盆、門掃き、京町家、京ことばなどを挙げています。文化としての価値は評価されていないかもしれませんが、生活に密着しているからこそ、京都の特色の土台といえるものではないかと思います。身近なものは、文化という意識を持たないかと思えます。しかしながら、そういったものが、京都の文化の中で大事なものではないかと思えます。このような生活文化の振興について、ぜひ皆様の視点からご協議いただきたいと思えます。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

京都は、国内外問わず、文化財にばかり目がいて、そこから文化庁の移転という捉え方をしている方が多いですが、京都の中心街はほとんどが幕末明治維新の混乱の中で焼けてしまい、文化財は鎌倉期のものしか残っていません。文化財だけではなく、先駆的に様々なことを打ち出してきた生活文化・社会文化が、今後の展開で大きなキーになると思えます。日常生活の経験や具体的なことも含めて、ご意見をいただきたいと思えます。



○ 森 清頭 副議長（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

清水寺では、国宝の本堂の建物をはじめ、重要文化財等をお守りしています。そのような側面から見ると、職人が減っていく現状もありますが、職人が使う材料や道具もなくなってきました。例えば、漆では、漆を掻くための「かんな」のような道具を作る鍛冶職人がいなくなったら、作れなくなります。また、袈裟も、襦袢を織る方が高齢で、生地が作れなくなったなどという状況が出てきています。

文化庁は国の機関なので、やはり日本全体の文化を考えていく必要があります。文化庁の予算について、文化財の修復予算はあまり変わらないのですが、指定文化財が増えているの

で、結果的に目減りしています。お金を生み出すことができないので、予算の増額が難しいのが現状のようです。

文化庁が京都に移ってきたことにおいて、京都からの発信の仕方が大事だということ、文化が身近すぎて、私たちが認識できていないとの指摘がありました。まさにそうだと思います。

京都のまちが選定された理由は、全部昔の話です。京都の中心部は焼けてしまい町も大分変わってきており、さらに職人さんが減り、材料がなくなってきたらどうしようかという状況になっています。昔の京都のポテンシャルを維持できているか不安を感じます。ですから、私たちの中でもう一度、文化の掘り起こしをする作業が必要になってくるのではないかと思います。



そして、そこには教育の問題が大きなウエイトを占めてくるのではないかと思います。

京都の小・中・高校生が学校でお茶やお花を体験できるのが京都の強みでもあるし、そのようなものがすぐそばにあるというのも、京都の大きなポテンシャルです。それに対して、親世代がきちんと理解してくれているかという問題があります。美しいものなどに対して、それは華美なもの、ぜいたくなものという意識を感じます。

華道をされる方も減ってきていると聞きます。どうしたらいいかとおっしゃるのですが、例えば、お花（華道）ときくと、お免状などをイメージしますが、道端に生えているたんぽぽ一輪が綺麗だと思う、それをいつものコップに挿して綺麗だと思う、その美しいと感じること、美というものが、特別ぜいたくなものではなく、自らの中にあるのだと思います。たとえ1枚100円のお皿でも、私はなぜこのお皿が好きなのかが説明できるようなモノの見方を子どもたちに育成していくこと、文化に対する触れ方を広めていくことが大事だと思っています。

この機会にぜひお願いしたいのが、二条城で文化庁長官に^{かみしち}袴を付けて座っていただいて、海外の方が来られたら、「上段の間」などで「よう来られましたなあ」とお迎えいただき、庭を見ながらお茶を飲んでお話ししていただき、京都を前面に出しておもてなしをしてはどうかと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

形にとらわれるのではなく、日常的に花の美しさを表すということで、例えば、先斗町では花を軒々に飾ったり、またお東さん（東本願寺）から涉成園に至るまでの道に花灯路をされたり、それぞれ工夫してアイデアを出し合うのは、大事なことだと思います。

森委員の清水寺も、定期的に檜舞台の檜を替えておられます。莫大な費用がかかりますが、そうしないと技術が継承されません。ですので、幅広い方に現状を理解いただくことが必要です。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）【メッセージ】

「文化庁が京都に」と聞き、東京一極集中を是正する取組の始まりかなというくらいの思

いでした。文化財が豊かな京都に移転というのは、自然な流れだとも思いましたが、私にとって身近に感じられることではなかったです。

ただ、「文化」について考えたとき、それは文化遺産や歴史的建造物だけではなく、地域に根差した生活文化も当てはまるといことがわかってきました。

その地域で受け継がれてきたものは、外から見たら驚きであったり不思議なことであったりします。例えば、私は堺市の出身ですが、「あしあらい」という言葉を職場で聞いたとき「なにそれ？」という思いでした。他にも初めて聞く言葉がいくつかあり、また婉曲な言い回しに戸惑うこともありました。しかし、それらも都があった昔から受け継がれてきた京都人の思いが入っているのだとわかりました。

また、女性会で「環境に関する取組について」のアンケートを実施したときに、「門掃き」という身近な取組を上げている学区が多くありました。これも、ご近所さんと程よい関係を保ちお互いを気遣う工夫の一つと知りました。

女性会では、子どもたちに茶道の体験をしてもらったり、地域で生け花サークルをしたり様々な取組をしています。些細な事ですが、これらの活動を通して、京都の地域に根差した身近な文化を受け継いでいく橋渡しができればと考えています。



○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）【メッセージ】

いよいよ文化庁が京都に移転し、京都発で施行されます。京都における伝統文化は、世界遺産等、幅広く奥深いものがあります。京都ならではの生活に結びついた伝統文化を、今まで以上に日本の文化として、^{まつりごと}政として、公に地域と共に歩みを進めてほしいと願います。

文化の力で、生きる力、生活力や希望を次世代につなげていくことは、とても大切なことであり、幼い頃から自然と伝統文化を体験でき、教育や事業、生活に至るまで、様々な催しを繋ぎながら、府民全体で、また日本全体で取り組めるような文化の発信力を期待します。年間カレンダーで、春夏秋冬、月別で文化の政を明記し、京都府民のものとして実行し、次世代につなげていきましょう。願いは、「文化力の発信を通じた世界平和」を。

○ 柗木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

京都市立高校で伝統文化について学ぶ取組は、随分前から行われ、私も18年前から、着物や浴衣を通して着物文化について学ぶ授業をしています。

また、同志社大学でも、留学生を含めた学生に着物文化についての講義をしています。大学生に、なぜこの授業を受講したのかを聞くと、伝統的な京都の町並みや茶道、伝統芸能など京都ならではの授業を受けたかったと言っていました。

留学生やインバウンドの方たちが、日本を知るきっかけとしては、漫画、アニメ、映画、ゲームなどのサブカルチャーが多いです。サブカルチャーで日本を知り、日本に来て、リアル文化を知りたいと思っています。



今、地方でもアニメや映画で撮影された場所を巡る聖地巡礼のプログラムを組んでいると聞きます。経済効果も得られるため、サブではなく、メインに入ってもらうための導入や、知るきっかけとしてのサブカルチャーは、今後、特に重要なコンテンツではないかと思いません。

もう一つ（大切にしたいの）が芸術です。クラシックの舞台、バレエ、音楽など、アーティストが日本で育っていく環境について、活躍する場所がないので、本業として生活していくのが難しいと聞きます。優秀な人材を育てていく環境と、活躍する場面・場所も重要になってくると思います。

先ほど森委員からもありましたが、私も着物に関わっており、工芸に関しては、鑑賞するものではないと思っています。着物以外でも、道具や工芸品は、使ってこそ意味があります。まず知り、見学して、体験することは大事ですが、日本人自身も、それを購入して自分のものにして使っていくこと、それが職人の技術を次世代につなげていくことにも大きく関わります。作る側の努力も必要ですが、レンタルや鑑賞用だけではなく、実際に使えるように、日本人の意識の改革が必要だと思います。

着物の技術や技法も、今70代～80代の方が染めておられ、「この方が最後なんですよ」とよく聞きます。10年後、20年後にはなくなっていく、そういう方たちの技術の継承も含めて捉えていかないといけないと思っています。

最後に、留学生に「これからどうするの？」と聞くと、「日本語と知識を生かして、母国に帰る」もしくは「日本で母国とのかけ橋になりたい」と言ってくれます。若い人が、日本に来て、京都で学んだことを今後に生かすということで、ぜひ期待したいと思っています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

生活文化について、構えずに、日常的に私たちがいろいろな場面でいかに伝えていくかということ、技術継承が重要だというお話でした。

また、サブカルチャーについて、映画や漫画は、京都に縁の深いものです。中でも漫画学はおそらく京都で発祥して、それが広く認められています。その辺りのところに、もう一度私たちは意識を新たにしないといけないのではないか。

○ 園部 晋吾 委員（NPO法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

文化については、遠のいている感じはしています。生活文化と言われている、本来生活に密着しているはずの部分が、生活からなくなっているのが実際のところだと思います。戦後、著しく生活の場からも、教育の場からも生活文化がなくなり、子どもたちにはなじみのないものになってしまいました。



文化庁が京都に移転してくるといふ大きな動きの中で、生活文化の大切さを再認識していく。これは良いきっかけだと思います。

京都市では、全ての小学生に茶道を、全ての中学生に華道を体験する機会があるのは、良いことです。子どものうちに、より多くの文化に触れさせることが大事です。華道・茶道だ

けではなく、食文化やその他の生活文化もそうです。子どもの頃の経験がベースとなり、次に文化に触れようと思ったときに、ハードルが下がるのです。大人になって、初めて茶道を始めようとする、非常にハードルが高くなります。子どものうちに一回触れておき、文化へのハードルを下げるのが大事なのではないかと思えます。

学校での文化体験については、学校によって、能や狂言に力を入れるなど、特色があってもよいのではないかと思えます。全員が華道・茶道の体験をした後で、この学校はこれを強化していきましょうなどという形でやっていくと、文化全体が活性化してくるのではないかと思えます。

文化というのは難しいことではなく、季節によって花を変える、着物を変えるなど、身近なことからスタートしてはどうかと思っています。

「文化は何のために必要なのですか」と聞かれました。文化というものを考えたときに、例えば「食」に関しては、一番早いのは、食べ物をそのまま丸かじりすることです。動物も昆虫も鳥も魚もそうしますが、人間だけがそうしません。なぜかという、人間には「もっともっと」という欲があります。食べ物は塊のままではなく、食べやすくするために切る、やわらかくするために煮るなどします。その行為の軌跡、積み上げていくものが、文化だと思えます。ですから、遠くにあるものではなくて、近くにあるものです。

心を満たす、心の豊かさというものが、私は文化だと思えます。ですので、「文化は、生活や生きてくために必要ない」と言う方がいるかもしれませんが、それは食べ物を丸かじりしている状態だと思えます。そうではなく、「綺麗な」「おいしいな」と、人と人が話し合いながらつながっていくことが、文化の一番大事な目的ではないかと思えます。人と人とをつなぐのがお花かお茶か、という違いだけです。人と人とのつながりをつくる。これが、文化の大きな役割でないかと思っています。



○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

最近、時間に追われるような生活を送っている社会人や学生は、どうしても「食」がなござりになっているように感じ、悲しいと思えます。ですので、今ご指摘いただいたように、子どもの頃の生活習慣や学校での体験が重要なキーになっています。大人になってから、自分で習慣化しようとしても、難しいことがたくさんあります。

そういう意味では、小学校等で実践されている華道や茶道などの文化に触れさせるということが大事ですので、推進していただきたいと思えます。

○ 西田 晋 委員（京都市小学校長会理事、京都市立市原野小学校長）

子どもたちに様々な文化との出会いをさせていきたいという思いはありますが、そういう機会に恵まれないと、自然発生的には出会えません。

ここで、小・中学校の取組を紹介させていただきます。

平成24年に「古典の日に関する法律」の趣旨を踏まえ、京都市立学校では、ほんまもんとの出会いを大切に、現在では全ての小学校で茶道の体験を、中学校では華道の体験をして

います。この他にも、葵祭は、全幼稚園児が見学をし、時代祭は、小学校6年生が見学します。「京の『匠』ふれあい事業」では、京友禅、組紐、清水焼、京扇子など、伝統産業職人による制作体験教室もあります。先日、本校では京仏具の体験をしました。子どもたちは丁寧に見本を見ながら体験している様子がありました。伝統文化の奥深さ、美しさも感じてくれたのではないかと考えています。



また、文化市民局の所管で「ようこそアーティスト」という様々なゲストティーチャーに来ていただく事業があります。先日、本校では、能と狂言の方に来ていただきました。映像でも見ることはできますが、生の声、迫力ある所作や音、雰囲気。子どもたちにとって、ほんまもんとお会いすることが素敵なことだと思っています。

また、教職員が三味線や琴を弾くなどの文化体験の研修を受け、子どもの指導に活かす取組も行っています。

最後に、食に関して、学校給食には京の伝統食を伝える献立があります。いわゆる「であいもん」と言われる料理の材料として相性の良いものとして、にしんなす。そして、おぼんざいや、正月にはごまめといったメニューも出ます。子どもたちに意図的に伝統食に触れさせる体験は大事だと思っています。その中で、地域の良さ、京都の良さ、日本の良さを知ってほしいと思っています。

○ 山口 修平 委員（令和4年度京都市PTA連絡協議会会長代理）

私は西陣織関係の仕事をしており、上京区の西陣の小学校へ授業に行っております。2年生から、最初は浴衣を着てみることから始めて、西陣織の歴史を学び、最終的には6年生で織機を使い、卒業製作として、自分たちでデザインした織物を作る取組をしています。毎回最初の授業で「ご家族が西陣織に関する仕事をされてる人はいますか」と聞きます。私が小学生の頃は、クラスの大半が帯織、糸屋、金糸作りと、西陣織関係の仕事をしていました。今は、クラスの30人の中で、西陣織関係の仕事をしている身内がいるのは2人でした。



昔は、登校する時、溝から酢の匂いがしていました。近くの染屋で色を落ちないようにするために使う酢酸という薬品の匂いでした。また、織機のカチャカチャという音を聞くこともなくなっています。そういったものを、今の子どもたちは感じなくなっているのが現状です。

一個の部品を作るメーカーが辞めるだけで、西陣織が生産できなくなる。部品がなくなると、専門の業者ではなく、金物屋などに行って、それに似たようなものを探してくる。それで何とかできるけれども、それが使えなくなったら、次は本当にできないということになります。

今、子どもたちに西陣織についての話をしても、最終的にはネガティブな話になってしまいます。子どもたちが今後、西陣織に触れようと思っても、「この地域で昔やったはったよね」という話しかできなくなっていくと思います。子どもたちに教えるのも、70歳以上の方々が

多く、私が48歳で飛び抜けて年下です。西陣織は、文化としては残るかもしれませんが、産業としては機能しておりません。賃金も、西陣織の業界は、朝8時から夕方6時頃まで1日機械を動かして、1日で稼げるのは、4,000~5,000円で、月10万円くらいにしかありません。当然、この業界に子どもたちは夢を持ってないです。このような部分を解消できれば、今後、西陣織の業界が残るのかなと思っています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

西陣織の業界は、非常に厳しい現状です。本当の意味での文化の継承、さらに発展というのは難しいです。どうしたら解決するかは難しいですが、やはりそれは総体として、京都市、あるいは文化に関わる者が考えていかなければならない問題だと思います。

○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

まず市田課長のお話をお伺いして、「かまど金」という言葉を初めて知りました。1800年代後半、明治維新の頃に、子どもがいないに関わらず、かまどがあるお家は小学校をつくるためにお金を出したということで、当時の京都の人は頑張ったんだと驚きました。



文化と言うと、まずは文化の「発信」ということが言われがちですが、発信と同時に「受け取り手」の育成も大事です。良いものを発信しても、受け取り手が成熟していなければ、素通りしてしまう。文化の受け取り手を育て、醸成していくような風土を作っていくことが大事だと思います。

また、伝統文化というと、高尚なもので敷居が高いと感じてしまいがちですが、それをいかに身近なところにもってくるか。私自身も茶道はしておらず、お茶の世界は大変そう、というイメージがあります。ですが、普段、私は原稿を書くとき、目を覚ますのに抹茶が一番良いので、マグカップで冷ましたお湯でお茶を点てたりして抹茶をよく飲んでます。まずはこんな感じで気軽に馴染んでいければいいのかなと思っています。子どものときは、お干菓子に魅力を感じませんでした。今は、お茶とお干菓子はとても合うものだと、自分の中での変化もあります。そういう形でだんだん馴染んでいく、受け取り手のほうの変化も大事だと思います。

行政として考えたとき、文化行政は真っ先に予算がカットされやすい。ですが、実は文化行政が一番コストパフォーマンスが良い、それほどお金をかけずに大きな効果を上げられるということを聞いたことがあります。

例えば短歌の世界でいうと、その土地出身の有名な歌人を押し出して地域おこしをしているところはいくつもありますし、夏目漱石や正岡子規がいた愛媛県は、俳句県と言われ、俳句や短歌が盛んです。私も関わっている「はがき歌」全国コンテストなどがあり、全国から何万首と応募があって、その中から選ばれた人が愛媛県松山市にやってくるという流れが出来ています。「俳句と言えば松山」というように「〇〇と言えば何県」というキャッチフレーズが出来上がるととても強い。私自身、高校生の時に教室に貼ってあったチラシで

「中野重治記念文学奨励賞—全国高校生詩のコンクール」という詩の賞を知り、応募して賞をいただいたことがありました。表彰式には行けなかったのですが、中野重治が生まれた福井県丸岡町というところに、いつか行かないといけなような意識がいまだにあり、機会があれば訪れてみたいと思っています。京都はもともと文化資源に恵まれ過ぎていますが、京都以外でも、それぞれの地域がこのような形で文化資源を掘り起こしながら、上手く活用していければと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

地域創生で一つの特色ある文化を、顔のような形で今後展開していくというのは、京都だけではなくて、日本のそれぞれの地域、それぞれの県で推進できる要素があると思います。一つのとこになれることが、京都から発信・提言ができればいいなと感じました。

○森口 真希 委員（株式会社堀場製作所ステンドグラスプロジェクト推進室室長）

企業は、伝統文化とは遠いと思われるかもしれませんが、堀場製作所では、海外に研修生や出向者を送り出すときに、日本の文化を知り、海外でしっかりと誇りを持って過ごしてほしいということで、滋賀県の工場にある茶室で、必ず茶室での経験や基本的な歴史や作法を知ってから海外に出てもらおうようにしています。海外に出て初めて、日本文化を知らなかったと気付く社員が多く、やはり外に出てみないと、自国の文化を知る必要性はわからないようです。



先ほど園部委員が、「何のための文化か」とおっしゃいましたが、創意工夫の積み重ねや豊かさの中で、日本人は効率化の道を選び、削ぎ落してしまったという経緯があるのではないかと思います。

海外に行って初めて日本の文化について知らなかったことに気付き、学び直したいと思って勉強し、そして海外で発信してくれる。自分でそれが必要だと思うことが、文化の再発掘の大事なポイントではないかと思います。

今日ご紹介いただいた明治の京都のあり方というのは、私自身も縁があり、私の曾祖父の関係で、嵐山のお茶室に行きました。その茶室は明治維新の後に、「日本、京都を何とかしたい」と、日本画壇の京都の画家たちが、日本の職人たち、お茶碗を作っている方、茶道具に関わる方、お菓子を作っている方のためにサロンを開いて、緩いつながりの中で掘り起こしていったそうです。そういう意味では、「文化を守らないといけないから、それを使う場面を作ろう」、「文化を伝えたいから、もう一回学びたい」など、内から出る気持ちもとても大事だと感じました。

私にも子どもがおり、良かれと思って様々なことをインプットしようとするのですが、必要性を感じないと、単に日常の中の体験として流れていくので悩ましくもあります。大人になって、自分がこんなに知らなかったのだと思って初めて、その少しの原体験からでも学び直しをして、発信ができると良いのではないかと思います。

今、弊社ではお客様をお招きする際にも文化に触れていただくことを大切にしています。

昨年11月に弊社の会長（堀場厚氏）が議長となった「日仏クラブ」という会には、茶道、華道、香道それぞれのお家元にご協力、ご賛同をいただき、まずフランスの方に京都の文化を知っていただいてから、会議に入るという形をとりました。経済やビジネスについて日仏財界トップが交流するためのミーティングですが、京都の文化に直接触れ、体験する中でフランスの方も驚かされていました。こんなに素晴らしい文化を日本、京都は持っているのだと、企画側の日本人にとっても、誇りをもう一度呼び起こさせる機会になりました。企業側も、文化の価値をもう一度世界に発信する。そして、世界から見た日本や京都が、私たちの知らない魅力の発見にもつながりますので、京都以外の人たちの様々な声を聞ける場があると良いと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

堀場製作所をはじめ、京都の企業は、十分に企業文化を世界に発信されています。京都で事業を展開されているのも、ある部分は京都の文化的素地の上に築かれてきたものがあって、他の土地ではそれだけのものを展開できないという判断のもとで、本社機能は京都に据えて頑張らせていただいている気がします。それも広い意味での文化と密接に関わる部分だと思えます。

日本人は、例えば海外に出ても、あまり自己主張しませんね。昨今は気性も変わってきて、WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）を見ていてもわかるように盛り上がりやすから、また違った形で、日本ならではの文化をそれぞれで発信していただきたいですし、そのためには、幼い頃から文化に十分に馴染み、自分なりにそれを咀嚼して、伝えるということを行っていただきたいと思っております。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社滋賀本社代表・編集局長）

今日はテーマが文化庁の移転を契機とするということですが、文化庁が京都に来たからといって、それが京都の文化振興につながるかというと、つながる部分もありますが、役所の移転ですので、そこは分けて考える必要があるのではないかと思います。

豊田委員のメッセージにもありましたが、京都で暮らしていると、京都の文化は教科書にも出てくるなど、全国から注目されるので、値打ちの高いものだと思ってしまうのですが、それぞれの地域にそれぞれの生活文化があります。例えば、滋賀県の大津には膳所焼美術館があり、膳所焼という有名な焼き物があります。そこでのお茶会には、全国から何百人という方が参加され、お茶の文化は、京都だけのものではなく、全国津々浦々で根付いているのではないかと思います。

先ほど園部委員もおっしゃったように、文化というのは人と人をつなぐものだと思います。それが料理かもしれないし、お茶やお花であるかもしれません。人と人をつなぐということ言うと、それは京都だけではなく、それぞれの地域で、人と人との間に介在しているものだと考えています。

文化庁もこれから日本全国の地域の多様な文化の掘り起こしをしていくということす



から、決して京都の文化がその他の地域の文化の上に立つという、上下関係で見てはいけな
いと思います。

文化というのは捉えどころがないですが、最近の文化行政全体を見て私が気になるのは、
文化を経済再生や儲けにいかにつなげるかという視点が露骨に出ているように思います。

一体、私たちの文化とはどういうものなのか。その地域、あるいは行政に関わって、文化
を向上させていくということがどうなのかと、その軸を定めないといけないと思っています。

歴史を紐解くと1970年代に、大阪や滋賀では、梅棹忠夫先生や司馬遼太郎さんなどが
集まって、新しい時代の文化はどうあるべきかという勉強会や研究会がありました。当時は、
高度成長に陰りが出てきて、文化の時代、地方の時代などと言われ、まさに時代の変り目
だったと思います。そういうことを考えると、この21世紀も、時代の大きな転換点にある
のかと思います。そういう時期に、文化とは、文化政策を進めていくとはどういうことか
という軸を、かつての梅棹さんや、司馬遼太郎さんに匹敵するような方で、もう一度議論し
てはどうかと思います。京都はそれができるところだと思います。新しい21世紀の文化施策
とはどういうものかという、その軸を京都から発信していけばどうかと思っています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

文化というものを今後どういう形で全国に展開していくのか、その際に、改めて文化とは
何かという問題から見直してみることが大切です。私たちとしても具体的に構想するのは
難しいところもありますが、やっていかないといけないと思っています。少なくとも、コス
トパフォーマンスだけを考えるようなことはやめておかないといけません。先ほど山口委
員からもご指摘がありましたように、採算の取れない文化は切り捨てるという話にもなり
かねませんので、近視眼的にそう捉えるのはおかしいということは、主張し続けなければい
けないと思います。

○ 岡田 智子 委員（市民公募委員）

「地域に根差した生活文化」について、私はずっと京都におりますが、何が文化であるかに気がつかないように思います。京都以外の方
と接して初めて、「これが京都の文化なのかな」と感じているところ
です。地藏盆の話に関東の方に言うと、知らないと言われ、地藏盆が
子どもたちの行事として地域で継承されていることに驚かれます。
地藏盆は子どものお祭りでしたが、今は高齢化でお年寄りの方が多
くなり、様相も変わってきています。先ほど西陣織の道具や、伝統的
な建築の材料についても、継承が大変だとおっしゃいましたが、地藏盆や門掃きも、「文化
をみんなでつないでいこうね」とシンプルな気持ちで続けることが大事になってくると感
じています。



例えば、私は、東寺のそばに住んでおり、平安京の時代から受け継いでいる塀が復元され
たなど、身近なところで1,000年以上の歴史を感じるものがあります。また、他府県の方

から、「京都市では看板に色の規制などをされていて、落ち着いた街並みだね」と言われます。京都に住んでいると気がつかないのですが、外から来られた方からの発言を聞いて気がつくことがあります。

門掃きについては、南区役所では一斉清掃という活動があり、そういう形で受け継いでいくのが大事かと思います。文化の保存は、個人の気持ちと、社会全体の意識の中でまとめられていくのが大事なのかなと思います。

最後に、非常に関心を持ったのが、文化庁の推進する施策方針に福祉という言葉が入っていて、文化庁が福祉と文化をどのように考えられるのかなと、今後の展開に期待しているところです。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

生活文化のひとつである門掃きについて、去年のサッカーワールドカップのときに日本人が掃除をしていましたが、これは門掃きの延長ではないかと思います。私は1年間ロンドンに住んでいたのですが、イギリスでは門掃きのような掃除をしません。家の外の掃除は、市の仕事だと言います。

「自分の身の回りはきっちりと自分できれいに保つ」という価値観が幼い頃からの習慣で形成されていくと、あのようにワールドカップの場に出るのではないかと、それも広い意味で文化かなと感じました。

○ 山野 真梨紗 委員（市民公募委員）

地域に根差した生活文化の掘り起こしということで、学校で伝統文化の授業を取り入れているという話を聞いて、素晴らしい実践をされ、ぜひ大学も含めていただきたいと思いました。やはり、より多くの人々が文化的な生活を享受するためには、その中に大学生も含まれていると思いますので、大学生がどのように関わっていくか、そして大学生がどう受けとめていくのかというのが肝心になるのではないかと思います。



私自身は大学で、能の選択授業がありました。大学の近くに能の舞台があるのですが、私はその授業を受けるまで知りませんでした。魅力的な施設や伝統文化が身近にありますが、伝統文化に興味を持っていても、大学生はその情報を得ることができていない状況です。ですので、それができる環境を整えていただきたいと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

京都は、全国から学生が集まり、市民の構成割合も多いので、地域の住民の方と連携するということが大事です。京都に来た4年間で、できるだけ京都の地域文化に接することに大事な意味があると思います。京都の地域文化に接する機会を十分に提供していくことが、今後の課題の一つとして受けとめなければならないと感じました。

○ 稲垣 恭子 委員（京都大学理事・副学長）【オンライン参加】

私は、文化というのは生活だと思ってきました。「文化」は「化ける」という字なので、文化は伝統であると同時に、生活の中で作られ、変わっていく、リクリエイトされるものです。京都から生活文化を発信するのは、非常に良いと思います。



知性を支えているのは感性や経験ですので、子どものときからの文化的経験が非常に大切です。まず、京都で文化体験モデルを作り、京都から発信できるといいと思っています。

京都には文化施設が多くあります。それらの施設を子どもたちにも十分に活用できるように、ストリート化とストーリー化があると良いです。ストリート化は、文化施設でバラバラにイベントや取組を行うのではなく、それがストリートとしてつながり、京都の文化というものにストーリーを作っていくような全体的な構想があるといいですね。様々な経験ができて、楽しめれば良いなと思います。

ロンドンのブリティッシュ・ミュージアム（大英博物館）では「スリープオーバー」という大胆なイベントを行っていました。小学生が寝袋を持ってブリティッシュ・ミュージアムのエジプシヤンの部屋などで一晩過ごし、朝、観光客が来る前にいろいろなところを見て帰るという取組です。夢の中にスフィンクスが出てきそうな環境で一晩過ごすということを行っていて、このような非常に心に残るような文化経験を京都でできるのではないかと考えていました。京都でしかできないということではなくて、一つの文化経験モデルという形でモデル化して、伝えていけると良いです。今年開設予定の京都大学の学童保育施設でも、大学の様々なリソースを使ったアカデミックプログラムや、地域の人と一緒に協力して京都の生活文化を体験できるようなプログラムを提供したいと思っています。

もう一つは、文化というのは伝統文化も含めて、生活の中でアップデートされていくべきもの、変わっていくものだと思うので、伝統文化そのものを継承するだけではなくて、アップデートし新しい生活文化を作っていくという方向で考えていけたらと思っています。伝統文化は、現在の生活でも魅力があり、可能性があります。SDGsなどと結びつけて考えるとわかりやすいと思います。

先ほど議長が「門掃きが、ワールドカップのお掃除に繋がっている」と言われたように、伝統的な文化が、世界的なレベルでも通用するような文化として認識されていくといいと思っています。新生活を作っていくことが、伝統産業を新しい意味での産業にしていくことにつながります。文化産業というただ単に商品につなげるというレベルの話ではなく、京都の企業や、伝統産業の作り手などをつないで新しい文化産業へと育てていくことが大事ではないかと考えています。おそらく今、プロデュースし、それを文化産業として育てていく仕組みが一番足りないのだと思います。だから、プロデュースする仕組みを作ることを協力して考えていき、京都モデルを発信できるといいなと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

文化庁と連携して、全体をコーディネートするような、そこで新たな文化のありようを發

信していく仕組みを作るという、京都ならではの動きができると良いです。それがひいては生活文化の全体の向上・発展につながっているということで大事な視点だと思います。

社会教育委員会議でも、生活文化に関連した事柄が課題としてよく取り上げられますので、その都度、皆さんからご意見をいただき、行政等にも反映していただきたいと思っております。

■ 報告-1 「京まなびいニュースレター」について

京まなびいニュースレターを発行しました。今回左の面では、「京まなびパスポート」を取り上げております。パスポート1冊100まなびはハードルが高いというご意見を山野委員からも頂戴しており、まず5まなびから気軽に初めてみる「[スタートダッシュお試しシート](#)」を作成しております。右のページのまなびいのつぼでは、市民公募委員のお二人にコラムを作成いただきました。

■ 報告-2 令和5年度指定都市社会教育委員連絡協議会（WEB開催）について

指定都市社会教育委員連絡協議会は、指定都市の社会教育委員が集まり、協議や情報交換を行う場として設けられています。令和5年7月6日にオンラインで開催されますが、今年は7月1日に社会教育委員の皆さまの改選があるため、後日、改選状況を見ながら、議長と相談のうえ対応します。

■ 報告-3 令和5年度京都市教育委員会予算案について

令和5年度教育委員会の予算案については、行財政改革計画の集中改革期間であることを踏まえ、引き続き、事業の見直しと職員数の適正化に取り組む一方、学力向上対策やGIGAスクール構想による一人一台端末環境を活用した先進的な学びの実現、伝統文化体験、高校改革、障害のある子どもへの教育、いじめ対策、不登校児童生徒支援などの取組を進めるとともに、市立中学校での全員制給食実施を視野に入れた基礎調査への着手、小中学校のバリアフリー化、中学校の休日運動部活動の地域移行推進などに取り組むこととしております。生涯学習に関する予算といたしましては、コロナ禍で年々下降していた予算が若干増額に転じており、図書館での電子図書の充実をはじめとした市民の生涯学習環境の充実に取り組むこととしております。

もう1点、社会教育団体への補助金の予算です。社会教育法第13条で、補助金については、あらかじめ社会教育委員の意見を聞かないといけないとされております。交付の目的は、社会教育活動の支援です。ご確認をお願いいたします。

■ 報告-4 令和5年度「学校教育の重点」（京都市教育委員会）について

「学校教育の重点」については、学校教育にかかる指針や重点取組について全教職員と教育委員会、また地域・保護者の方と共有するため、毎年度、策定しているものです。

令和5年度は、本市の目指す子ども像を、昨年度に引き続き「伝統と文化を引き継ぎ、次代と自らの未来を創造する子ども」とし、その具体的な3つの姿を示しております。そのう

えで、全教職員に意識してもらいたい学校園づくりの5つの柱を示すとともに、生きる力を育む15の取組として、各学校が進める具体的な取組や、各校種での重視する視点を示しております。

今回の重点の策定にあたっては、子ども一人一台端末の活用によるGIGAスクール構想の推進や部活動の地域移行など、学校教育の在り方の変革期であることも意識しつつ、「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」というかねてから本市が大切にしてきた理念は変わらず重要であるということも改めて確認できるものとしています。あわせて、校園長のリーダーシップの下、教員自身が他の教員と協働し、主体的に学びながら、地域や子どもの実情に応じて、従来の枠にとらわれず、積極的に新しい取組にチャレンジしてほしいというメッセージを込めております。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

■ 閉会

■ 閉会挨拶（的山部長）

